

静岡県日中友好協議会

No.121

2020.12

NEWS LETTER



視窓

歴史と未来を築く建築 / 台州現代美術館

『台州現代美術館』は「伝統を活性化し、未来を展示する」ことをコンセプトとして、有名な建築家、柳亦春によって設計されました。美術館のある旧穀坊文創園は、総建築面積は2450平方メートル。前身は独特な歴史的伝統を持つ沙門穀倉庫で、旧ソビエト連邦建築スタイルの工場と倉庫があった広いエリアです。

美術館南側の建築正面デザインは、内部天井のアーチが外側に広がり、広場に面した正面を構成するかのように、浅い凹みの波形に処理されています。展示室は、全部で8つあります。壁面は粗いコンクリートの打ちっぱなしで、筒状のアーチ構造によって形成される空間になっており、展示ホールの照明デザインと建物の内側と外側を、空間的にとてもよく組み合わせています。天井が高く、来館者は螺旋状に上がって建物に入り、最上階のメインホールに到着すると、そこからは近くの山脈を手に取るような景観が目に入ります。

〈台州現代美術館〉 住所：浙江省台州市椒江区楓山路5号老糧坊文化創意園

【特集】 オンラインで開催

静岡県・浙江省経済交流促進機構第29回全体会議

11月25日(水)静岡県庁の特別会議室において、静岡県・浙江省経済交流促進機構第29回全体会議がオンラインで開催されました。今年の全体会議は、本来なら浙江省委員会の代表委員を迎えて静岡で開催する予定でしたが、新型コロナウィルス感染症拡大の影響により実現できず、双方の努力により、オンライン形式での開催となりました。ウイズコロナ、アフターコロナの時代の新しい交流方式を構築するため、一つの方向性を提案するとともに、両県省の交流状況、進捗状況に関する情報を共有する機会となりました。

◎静岡県委員会主席代表 栗原績 挨拶要旨

今年は、年初より、新型コロナウィルス感染症の感染拡大により、両県省の交流事業が停止せざるを得ない状況になってしまいました。しかし、その反面、実際の往来はできませんでしたが、丁度、積極的に利用し始めていたリモートを利用しての交流が積極的に行われるようになり、この方法は、いろいろなところに取り入れられるようになってきました。これは、暗闇の中に光を見出したようでもあり、また、逆境を好転させる方法ともなったと思います。

再来年は、両県省友好提携締結40周年という記念すべき年であります。そのため、来年は、各分野での交流をこれまで以上に推進していきたいと願っておりますが、今回の経験を活かし、実際の往来のみでなく、オンラインでの交流をより一層活用し、これまで以上に、広く深く成果のある交流を目指していきたいと考えております。



【静岡県日中友好協議会理事長 栗原績】

◎浙江省委員会主席代表 朱従玖 挨拶要旨

今年になって、浙江省と静岡県では、省県指導部の共通認識と第28回全体会議の精神を真剣に実行し、「1つのメカニズム（指導部の指導、部門間で推進、民間参加の友好提携締結先の協力メカニズム）と4つのプラットフォーム（交流対話のプラットフォーム・産業マッチングのプラットフォーム・投資促進のプラットフォーム・イノベーションサービスのプラットフォーム）を建設の重点とし、感染症対策や交流事業を有効的に統一的に案配し、企業の従業員復職と生産回復を支援し、産業チェーンサプライチェーンの協力を強化し、福祉介護・衛生・農業等の分野の交流を強化し、感染症がもたらす不利な影響の排除に努め、喜ばしい交流の成果を収めてまいりました。

2021年は、100年に1度の大変革とアフターコロナの時代の複雑かつ厳しい国際情勢に直面しておりますが、浙江省と静岡県の友好提携締結協力のより深くより実務的に一層推し進めるため、「1. 双方の相互交流を安定的に進める。2. 正確なマッチング協力を強化する。3. 感染症予防対策での協力を強化する」3つを提案します。

双方の委員会が、促進機構の役割をより發揮し、意思疎通を図り、手を取り合って協力し、全方位で、多分野の深い省県友好提携の新しい枠組みの構築を推進し、新しい成果を収めていくことを願っております。



【浙江省人民政府副省長 朱従玖】

2021年度の事業計画 概要

1. 機構第30回会議の開催について

オンライン・オフライン方式により、新型コロナウィルス感染症の状況を見ながら、静岡県・浙江省経済交流促進機構第30回全体会議を2021年秋、静岡にて開催する。

2. 組織的交流の推進について

- ・浙江省工商業聯合会と静岡県商工会議所連合会との交流提携締結に協力する。
- ・浙江省駐日本（北東アジア）商務代表処・日本浙江総商会が推進する省県間交流協力に協力する。
- ・浙江省・静岡県グローバル重要農業文化遺産交流メカニズム構築の検討をする。
- ・学校間提携を推進する。

3. 医療介護健康及び新型コロナウィルス感染症予防防護対策への協力について

- (1)衛生健康システム間の相互訪問交流を強化する。
- (2)『浙江省・静岡県介護福祉交流案』を策定し、介護福祉分野交流の協力をより一層強化する。
- (3)コロナ対策の物資の寄贈や予防防護経験を共有し、薬品の研究開発等の分野での協力を推進する。

4. 新しいマッチング交流パターンについて

- (1)「オンライン+オフライン」により、マッチング交流事業を展開する。
- (2)双方の各分野の相互訪問交流を拡大する。
- (3)浙江側は、日本文化観光交流のブランドプロジェクトを創設する。
- (4)青少年キャンプなどの交流事業を復活させ、青少年のeスポーツ分野の交流展開を模索する。
- (5)浙江と静岡間の就航路線を隨時回復し、相互訪問に便宜を図る。

5. 経済貿易投資協力拡大について

- (1)双方の企業によるマッチング・商談を展開し、貿易協力を拡大する。
- (2)企業へのサービスを強化し、経営ビジネス環境を整える。浙江省に進出している静岡県企業の増資・生産拡大や浙江省企業との産業サプライチェーン構築を支援する。
- (3)「浙江・静岡アジア協力センター」建設を共同して推進し、浙江企業の静岡での投資プロジェクト展開のため、支援する。

6. 研修養成交流の強化について

- (1)教育・科学技術・介護福祉などの分野での日本への訪問研修及び養成交流事業を実施。
- (2)浙江省中長期調査員を静岡に派遣する。相互に研修生及び関連分野の専門技術者を派遣する。
- (3)「日本の専門家の浙江旅行」を実施し、静岡の技術専門家を招聘し、浙江省にてセミナーを開催。

7. 浙江省投資ガイド2021年版の発行



【オンラインで一堂に会して】

静岡県中国駐在員事務所に着任しました

静岡県中国駐在員事務所長

浅原 敏治



<赴任あいさつ>

4月1日付で赴任する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、遅れること6か月、9月25日に渡航し、上海市内で14日間の隔離生活を得て、10月12日から事務所に勤務できるようになりました。中国の第一印象は、コロナに対する警戒心の高さです。この国では1人でも市中感染者が生じると、市外への移動の際、PCR陰性証明保持者しか移動できないようにします。そして、感染者を封じ込めます。なお、飲食店の夜間営業自粛はありません。朝夕の地下鉄やバスの混雑も変わりません。「封じ込めによりコロナに勝つ！」中国での感染者が増えないのは、この考え方を誰もが持つて行動されているからなのでしょう。

<初仕事：第3回中国国際輸入博>

11月5日(木)～10日(火)、第3回中国国際輸入博覽会が上海市虹橋商務区の国会会展中心で開催されました。参加企業数は約2800社、来場者数は約40万人。来場者は事前登録し、来場前7日以内のPCR検査・陰性証明書保持者のみとされ、更に海外からの来場者は、入国後14日間の隔離措置が必要とされ、厳重な警戒態勢の中で行われました。展示品も中国に到着してから念入りに消毒措置等が行われ、陳列までに日時を要しました。このため、実物でなく、パネルや映像を展示する企業も数多く見られました。こうした中、静岡県からは水産会社、製菓会社の他、中国輸出を狙う企業の商品等が出展され、これらの企業の商品は全て実物で、通りすがりに足を止め、商品を手にしながら確認する来場者が数多く見られました。

今年は、商品を説明する企業の職員が配置されず、日本と会場をオンラインで結んで商談するスタイルで進められた。オンライン商談専用の場も設けられていたが、利用者は少なく、写真を撮ったり、連絡先を聞いたりする程度の来場者が多いように見受けられました。

オンライン。大変便利な仕組みであるが、賑やかさを作り上げることは難しく、対面で商品を見ながら話をし、賑やかな雰囲気の中で商談は進んでいくものと、私は改めて感じました。コロナの終息と一日も早い渡航の再開が待ち望れます。



【中国国際輸入博の様子】
(中央：浅原所長)

<旧日本人街の今を訪ねて～内山書店跡と四行倉庫～>



【現在の四行倉庫】

上海市虹口（ホンキュー）。日中戦争のころ、10万人を超える日本人が住んでいたエリア。この地にある内山書店跡。1920年前後に日本人の内山完造が経営していたこの店は、日本人のほか魯迅などが足を運び、近隣住民の憩いの場であったことから、施設内には内山と魯迅が談笑している絵が飾られています。

一方、この場所から4キロ離れたところにある四行倉庫。1937年の日中戦争の激戦地で、800人の中国兵士が日本軍からこの倉庫を守った戦いを描いた「八佰（バーバイ）」という映画が今夏の中国で大ヒットし、観光地となっている。

くつついたり、離れたりを繰り返してきた日中両国の歴史を肌で感じる街歩きは実に面白いと感じました。

トレンドナウ（潮流奔騰）

交通・地図・旅行関連アプリ

中国にも外出する際に便利な、地図・交通・旅行関連のアプリが数多くあります。近年、急速に都市化が進み、新規地下鉄路線が次々に開通していますが、地図アプリがあれば、最新の移動経路を検索することができます。

「高徳地図」



「高徳地図」は、中国で使える地図アプリ。出発地点と目的地点を入力すると、車や自転車など様々な交通手段を教えてくれます。運転ルートや正確な道路状況を把握でき、リアルタイムで渋滞を避けることができます。その他、バスの全行程のナビゲーション、リアルタイムのバス情報、音声ガイドなどの機能があります。

「百度地図」



「百度地図」は、中国の検索エンジンである百度が提供している、地図アプリ。通常の地図検索に加えて、渋滞予測や事故などの道路交通情報、スポット検索では観光地・飲食店の検索や宿泊施設の予約、ナビでは目的地までのルート検索や配車、AIアシスタントでは通訳やレート計算をはじめとする、旅行に役立つ機能が利用できます。

「高鉄管家」



「高鉄管家」いつでもどこでも、列車の切符の購入や座席の指定・キャンセル・変更ができる。「中国鉄路12306」とリアルタイム同期しており、チケット残数・価格・時刻表を確認できます。

「杭州公交」



「杭州公交」は、杭州市バスグループが開発したバスアプリ。現在の位置情報から、自動的に近くのバス停やバスのリアルタイムの位置、路線情報などが表示され、バスの到着時間等を確認することができます。

上海などでも同様に、その都市のバスアプリがあるので、路線バスを利用する際に利用すると便利です。

「携程旅行」



「携程旅行」は中国版“Ctrip”。飛行機や高速鉄道からホテルの予約まで可能できる、中国で一番使われている旅行アプリ。但し、使用言語は中国語のみです。

漢方生活：蓬（ヨモギ）・棗（ナツメ）

寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県立大学グローバル地域センター客員講師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井香織



中国では、冷たい飲み物を避ける習慣があります。夏の暑い日でも、学生に「何か冷たいもの、飲みませんか。」と誘うと、「先生、冷たいものは体によくありません。体にいいスイーツを食べましょう。」と言われ、出てきたスイーツには、ナツメ、クコの実、竜眼などが入っていました。今回は、このスイーツに代表される体と心によい中国の漢方生活を紹介します。



中国の日常生活でよく使われている漢方薬材を10種類あげると、蓬（ヨモギ）、棗（ナツメ）、竜眼（リュウガン）、蓮（ハス）の実、枸杞（クコ）の実、黃耆（コウギ）、当帰（トウキ）、菊花、陳皮、山楂子（サンザシ）があります。

日本で草餅に使われているヨモギは、中国ではお菓子だけでなく、様々な用途に使われています。清明節（先祖を祭る伝統的な祭日）を迎えるとき、中国南方の農家では、もち米とヨモギを蒸してヨモギ餅を作り家族で食べます。また、寒い日が続く冬の夜、足湯で体を温めるときの浴剤に、ヨモギを使います。ヨモギには、体を温め、血行をよくするだけでなく、リラックスして安眠できるという効果もあるようです。旧暦5月5日の端午の節句のときには、ヨモギの葉を家のドアに掛けます。この時期は蒸し暑く、細菌や虫が発生しやすいため、ヨモギの特別な香りを利用して、殺菌し虫を駆除します。さらに、ヨモギにより、不吉なものから自分の身を守る、とも考えられているようです。

次にナツメを紹介しましょう。ナツメは、リンゴやナシに似た食感の果物です。ほんのりとした甘みと酸味があり、夏から秋にかけて、スーパーで山積みになっています。どちらかというと中国人は、生より乾燥したナツメを好みます。乾燥ナツメをそのまま吃るのはもちろん、ナツメ茶、ナツメ粥、ナツメご飯のほか、スープやスイーツなど、食べ方はたくさんあります。中国では古くから「1日に3粒のナツメを吃ると100歳になても年を取らない」と言われており、アンチエイジングや滋養強壮に効果があると考えられているのです。また、ナツメは中国の結婚式には欠かせない、縁起のよい食べ物です。それは「早生貴子」（子宝に恵まれるよう）という四字熟語の、「早」と「枣」（ナツメ）の中国語の音が同じということから、ナツメを食べて縁起を担いでいるわけです。



漢方というと、煎じて飲む苦い薬や、葛根湯などよく知られている漢方薬をイメージするかもしれません。ところが中国では、ここに紹介したように、薬というよりもっと身近で、人々の生活の一部になっているのです。

“中国博物館紀行”

臨海市国華珠算博物館

浙江省台州市臨海市立發路深浦西路117号

中国の博物館の中で唯一、珠算の収集、展示、研究、デザインを一体化した専門博物館が浙江省の臨海市にあります。1993年11月に建てられた中国最大規模の施設です。中国の「5大発明」の1つと称される“珠算”は、そろばんを使った伝統的な計算方法で、無形文化遺産にも登録されています。館内には、古今東西のそろばん、計算器具1300種以上、珠算史料1000点以上、国内外の珠算交流活動写真、受賞成果などの資料1500点以上が収蔵されています。



博物館には、そろばんホール、珍品ホール、資料ホールなど3つの展示室があります。展示品は、古代原始計算器の模型と様々な歴史的年代のそろばんが、順番に並べられています。例えば、西周陶丸、春秋の算木や河北省巨鹿県で出土した北宋の数珠などの複製品、海外のエジプトの砂そろばん、ヨーロッパのラインそろばん、ローマの溝ソロバン、17世紀に発明された計算尺などがあります。その他、宝塔形、園桶形、壁掛け形など様々な形のそろばんや、純玉、翠玉、翡翠、象牙、真珠、七宝焼、陶磁器、香木、玉の腕輪、指輪、孫の手、仏堂、巻き貝、如意、八卦、石の彫刻などの珍しいそろばん、部隊が移動する時に使ったそろばん等貴重なものも揃っています。

コレクションの中で特徴的なのは「4つの最高」そろばんです。1つ目は、世界最大の木製そろばん（長さ6.52m、高さ1.68m、重さ1008kg）、2つ目は、段位が最も多いそろばん（長さ6.12m、225段、1575粒の珠から成り、15人で同時使用可能）、3つ目は、最も重い金属そろばん（ブロンズ鋳造、明式鼓形の珠、7珠、9段、重さ589kg）、4つ目は、最小のそろばん（わずか0.5×10cm、銀の紋様で精製され、段の棒は髪の毛のように細く、各珠は針の先で動かすことができる）。4つともギネス世界記録を申請されています。

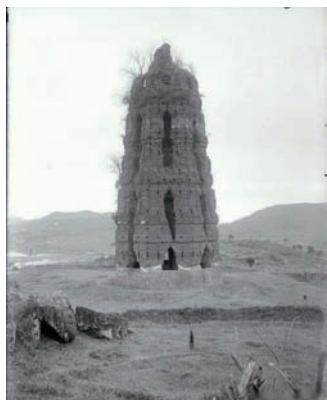
作家が見た中国へタイムトリップ

谷崎潤一郎、中国の旅

耽美主義の小説家として著名な谷崎潤一郎（1886年～1965年）は、幼少時代から漢学に触れ、中国に憧れを持っていました。谷崎は、1918（大正7）年と1926（大正15）年に中国を訪れ、中国の多くの文化人と交流があり、その経験が、日中文壇の逸話となっています。特に第1回の中国旅行の後には、「支那趣味」と呼ばれる異国情緒あふれる作品を多数発表しています。

谷崎潤一郎は小学校に通い始めたばかりの6歳の時に、漢学に精通していた担任の先生の影響で文学に目覚めました。そして13歳の時に母親の勧めで、貫輪秋香塾で漢文の素読を受けるようになります。幼少時代から漢学の熏陶を受けた谷崎は、中国に思いを馳せるようになっていきました。

初めて中国を訪問したのは1918年10月、谷崎が32歳の時です。まず、遼寧省瀋陽市を経由して北京へ行き、そこから湖北省の漢口へ行った後、船で川に沿って西に向かい、廬山を観光してから南京に向かっています。その旅は12月上旬まで続き、その後、列車で蘇州、上海、杭州を旅行しています。中国を訪問した一番の理由は「演劇を見るため」だったと言っています。滞在中何度も劇場へ足を運んで演劇を鑑賞しています。蘇州や杭州、上海で流行している新劇も鑑賞し、京劇の名優である梅蘭芳や尚小雲、王鳳卿などの演技を評価しています。



旧雷峰塔

帰国後、谷崎は「蘇州日記」、「中国旅行」、「秦淮の夜」など、中国の旅に関する作品を次々に発表しました。その中には「西湖の月」、「天鷲絨の夢」など、杭州の西湖を題材としたものもあります。谷崎は11月に一週間ほど滞在した杭州をとても気に入り、紀行文の中で、杭州料理をとても褒めています。

夜更けには、西湖に浮かぶ三潭印月や湖心亭のほのかな陰影を堪能しており、「西湖」を『西湖の月』の中で以下のように表現しています。

「此處に湛へられて居る三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様な、例へばとろゝのやうな重みのある滑らかさと飴のやうな粘りとを持つて居るからである。此の水の数滴を掌に掬んで暫く空中に曝して置いたらなら、冷やゝかな月の光を受け留めて水晶の如く凝り固まつてしまふだらう」と表現しています。また、谷崎が見た雷峰塔は現在の倒壊後再建される前の姿です。谷崎は当時の雷峰塔を見て（現在の雷峰塔は後に倒壊後の再建）、「今から千年近くも前の遠い五代の世に建てられたと云う塔は、幾何学的の直線がぼろぼろに壊れて玉蜀黍（とうもろこし）の頭のようになつて居ながら、それでも煉瓦の色だけは未だ悉くは褪てしまはずに、斜陽を浴びて一層あかあかと反射している・・・」と表現しています。

2度目の中国は、1926年1月に上海を訪問し、1ヶ月滞在しました。この時は、内山書店の経営者の紹介もあり、谷崎は郭沫若などを始めとする上海の新文化、新文学界の文化人と会って交流しています。帰国後、旅行で見聞きしたことなどを記録した「上海見聞録」や「上海交遊記」を発表し、今でも日中の作家の友好交流に関する貴重な資料となっています。